
時空に浮ぶ城

imaiwa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時空に浮ぶ城

【著者名】

i m a i w a

【あらすじ】

連載候補摸索中。ある口庭の異変に気づき窓を開けてしまった孝美。彼女はひょんなことから時空城で下女のような生活をすることになる。ひょんなことはいつか述べるかもです。オチなし。

(前書き)

連載候補テスト作品。

「あなたを奪いに来ました」

「は？ 何言つてんの？」

満月の夜、アイツは私の部屋の窓の様に汚い足をのづけて臭いセリフを吐いた。

私の彼氏、佐伯正志である。濃紺の背広上下に赤いネクタイ、白いワイシャツ、まあサラリーマンなんで当然と言えば当然の格好をしている。

しかし、今は深夜2時だ……

「いいじゃん……たまには姫を迎えて来た王子様気取りたいんだよ」

「

どうも様子がおかしい。間延びした語尾、間の抜けた顔に、
逃えたような酒臭さ。

酔ってるらしい、酔つて人の家に不法侵入して、どうやって上がつたか知らないけど、2階の窓の外にいた。鍵は開けてやった。この寒空でさすがにかわいそそうだからね。

「孝美、お前な～、携帯何度もメール送つてるのにな～見ろよハゲ
～！ オゲ～！」

ち、ちょっと、吐くなよ！ 私は咄嗟に正志を部屋に引っ張り上げると部屋に寝かせた。

部屋を急いで出ると、洗面器を取りにお風呂場へ直行する。
畳の上や布団の上で吐かれでもしたら、最悪だ。

洗面器を暗がりから引張り出すと、廊下を通り部屋へ向おうとした。

だが、比較的長い廊下に建ち並ぶ格子窓の向こうの異変に気づいて、私は立ち止まってしまった。今から考えると、この時これを見ない不利して通り過ぎていれば……って思うが、仕方が無い。

だけど、そこにはどんな光景が繰り広げられていた。

窓の外にはこじんまりした庭があつたはずだった。しかし実際は綺麗な砂浜が見えていた。

深夜のはずなのに、太陽の日差しは執拗に照り付け、思わず落差に目を細めてしまう。

砂浜の向こうには真っ青な海がどこまでも続いていた。

私は夢でも見ていいのかと思い、頬っぺたを抓つてみる。

痛い……痛いんです……そのリアルな刺激に夢ではないと確信はしないけど、半ば思つた。

ただ、それだけなら、良かつた。だけど、更に、砂浜の向こうから小麦色の肌をした兄ちゃんが近付いてきたりした。麦藁帽子かぶつて、青い海パン一丁の兄ちゃんは氣さくにこちらに手を振つていた。あんまり笑顔が清清しいんで、こちらも思わず手を振り替えした。

間近までやつてくると、その兄ちゃんは、窓越しに張り付いて、こちらのどこかを指差していた。どうやら、窓の鍵開けて欲しいらしい。だけど、得体がしれないし、そつちは明るいけどこつちは深夜だし、今、家族は出かけていて、この大きめの家にいるのは年若い女である私と酔いつぶれた彼氏のみ。何かあつても正志は、今全くの役立たずだから、正直言うとこの窓を開けるのは怖い。そんなこんなでグズグズしていると、その比較的タイプのお兄ちゃんが、詰まらなさそうな顔をして背を向けて、砂浜の向こうへと歩いていく。

私は思わず後ろ髪惹かれる思いがして、咄嗟に錠を上げ窓を開け広げてしまった。

キー

その瞬間だった。いきなり窓の向こうの風景が暗雲に早代わりする、窓の外から風が吹き付けてきて私の体に絡みつき、そして窓の外へとパジャマの格好のまま吸い込まれてしまう。
迂闊だった……良く考えると今年の夏は仕事で海にもいけず、イケメンにも会えず、空しい夏の一時を過ごしていた。そこをアイツ等にまんまと突かれてしまったのであった。

（

「タカミー、メシはまだか？」

「タカミ姉ちゃん、絵本読んで～」

「ちょっと待って～、洗濯物干さないと……」

青い髪の背の高い男の子はミカサ、足元の小さな女の子はミサ。私が世話をすることになつているお子様だ。

ミサは年の頃7歳つてところかな。年齢は詳しくは知らない。尋ねたら本人が言つには316歳だと、馬鹿にしてるとは思うけど、何せ幼児の戯言、真面目に反応する方がばかばしい。

まあ、可愛いからいいんだけどね。

ただ、曲者なのがミカサだ。こいつは私より背が高い上に見た目の年齢も肉薄している。

更に、女好き、馬鹿、ずる賢い、一枚目、悪戯好き、手こわい要素が色々詰まつた奴だ。

ミサに絵本を読むために、前屈みになると決まって、上から胸の谷間を覗き込んでくる。

そういう奴だと思つてください。

「タカミー」

「あん？ なに？」

またびつせ、ろくでもない事言つつもりだ。
タカミが田を半分細めて鼻をひく突かせる時は、必ず何か悪巧み
を仕掛ける時と決まつている。

「時空城の進路が曲がつてゐるよー。」

「ええー？」

最初は疑つたが、それが本当だらうと嘘だらうとける訳がない。

私は大慌てで部屋を飛び出ると、時空上の操舵室がある上の階へ
と螺旋階段を上つていく。

時空城は今いる次元の狭間の中でいる分には、平穏そのものなん
だけど、そこを抜けてしまうと困つた事になつてしまつ。それは絶
対防がないといけない。私の最重要任務もある。

操舵室につくなり、舵が右舷に思いつきり流されていふといつ悲
惨な事態に出くわす。

「誰だ〜〜！ こんなことした馬鹿は〜〜！」

私は思いつきり舵を左に両手で引張る。
時空の潮流に舵が持つていかれている。
とても女の細腕では舵の修正は厳しかつた。
こんな時私が呼ぶ男は彼しかいない。操作室に幾つか並ぶ通話管

の一つの蓋を開くと、私は大声で叫ぶ。

『 シャガさん舵が～～～！ ヘルプニ～～～！』

『ん？』
OK!

野太いが頼りになる声が返つてきました。

白いシャツで大きな体を包む山のような大男、殆ど目が線なのは

ご愛嬌。 だけどこの船でもうとも私が頼りにしている御仁です。

「どれ、ちよつとやつてみないか？」

「お願いします～～～」

田をうるうるさせながら、シャガさんに手を合わせて会釈をした。
シャガさんは大きな口を開けて、任せとけっと親指を立てて微笑
んだ。

半パンにシャツというラフな格好だけど、とても頼りになります。太い腕、毛深い体、いやいや、今はそれどころじやないんだっけ。

「オリヤアアア！」

シャガさんが舵を思いつきり左に切ると、時空城が大きく傾いた
後、少しして平坦に戻る。

大きな息を吐くと、私に優しい瞳を向けて言った。

「まあ、大変じやろうけど、頑張つてな」

「はい！ 頑張ります！」

思わず、頑張るとか言つた。もう帰りたいんですけどね……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5208f/>

時空に浮ぶ城

2010年10月28日08時24分発行